同じ生活者として交流を

静岡文化芸術大教授（多文化共生論）

池上重弘副学長に聞く

今国会の論戦には、与野党とも大事な視点が欠けていた気がしてならない。外国人から見て日本は魅力的な働き場所と映っているのかという点だ。人口減少社会が進む中、新たな労働力を海外に求める趣旨は分かるが、肝心の外国人が日本で働きたいと思ってくれるかどうか。国内事情ばかり議論されていた印象を覚えた。

受け入れ拡大の対象業種も気掛かりだ。介護や建設、農業などは慢性的に人材不足の状況にある。外国人には〝嫌な仕事の押し付け〟と映らないだろうか。受け入れ拡大の前に、日本人自身がそうした職種の大切さを見つめ直してほしい。

短期的には国内に外国人労働者が増えるだろう。しかし、現代はインターネット時代。日本人が外国人を単なる労働力としか見なければ、評判はたちまち伝わり、日本は敬遠されるかもしれない。

魅力的と感じてもらうには、受け入れ先による労働環境や福利厚生などの整備ばかりでなく、地域も外国人労働者と積極的に交流を図り、コミュニティーの仲間として接点を持つことが重要だ。とりわけ本県は西部地区を中心に、既に多くの外国人労働者が定住している。忘れてならないのは彼らもまた、同じ生活者ということ。交流を避けて孤立させてはいけない。互いにあいさつし、祭りなどのイベントに参加し合えるような、顔が見える関係をもっと深める必要がある。

（聞き手＝社会部・薮崎拓也）

静岡新聞

©静岡新聞社　無断複製転載を禁じます